

閩北の普度と目連戯

——中国初期演劇史初探——

田 仲 一 成

序 問題の所在

中国の郷村演劇の発生を考える場合、郷村が災害の源として最も畏れた孤魂游魂を超度するための超幽建醮祭祀から演劇がどのようにして発生するかを追究することが重要な課題となる。このような郷村の超幽建醮祭祀の演劇への転化のプロセスは、中国各地において地域差もあり、エスニック・グループによる差異もあり得る。全国各地の状況を一挙に掌握し得るような段階ではないが、この数年来、西南辺境地区の状況が少しずつ明らかになりつつある。また東南沿海地区については、海外華僑社会に残された旧慣を調べることで若干、資料が得易いという調査上の便宜がある。何れ、これらを総合して判断し得る日がくるとは思うが、差当りは個別的研究を蓄積して行く外はない。

そこで本稿では、過去シンガポールで得た資料を軸に、福建省北部、所謂、閩北地区、即ち福州と莆田、仙游県の

集団について上記の問題を検討してみたい。掌握し得た資料に制約があるため、全面的な分析はむづかしいが、次の諸点を検討する。

- (一) 福州の超幽建醮儀礼(普度)は、過去の北宋—南宋期に集中して出現した超度科儀書のどの系統を引いているか。
 - (二) 莆田の超幽建醮(仏教系)に福州におけるような過去の科儀書からの継承関係・影響関係があるか否か。
 - (三) 福州、莆田の超幽建醮儀礼において、冒頭に招かれる田公元帥は、儀礼体系の中でどのような位置を占めているか。
 - (四) 福州—莆田の超幽建醮の中で、目連尊者はどのような位置を占めているか。
 - (五) 以上を踏まえた上で莆田、仙游の目連戯の位置を宗教史或は演劇史の上で、どのように考えることができるか。
- 以上の問題につき、以下、節を分かつて論ずる。

一 閩北普度の源流——『黄籙九幽醮無碍夜齋次第』とその沿革

中国の郷村祭祀の儀礼において、亡魂、孤魂の超度を目的とする「超度」が成立してきたのは、道教儀礼の歴史の上では、それほど古いことではなく、せいぜい五代—北宋の頃とされている。北宋期に成立した「黄籙齋」といわれているものが、その最も早いものである。ただ、この黄籙齋についての文献は、確かに北宋から南宋にかけて集中して現われてはくるものの、その地域、担い手、儀礼の特徴など、細部の点については、また学界の分析が始まったば

かりで、わからないことが多い。例えば、北宋期に源を発する黄籙齋文献としては、現在、次のものが知られている。

- (1) 『黄籙九幽醮無碍夜齋次第』(『道藏』第二九一冊)、北宋、無名氏編。
- (2) 『上清靈宝大法』(『道藏』第九六三冊)、金末元初、金允中編。
- (3) 『無上黄籙大齋立成儀』(『道藏』第二七八冊)、北宋末南宋初、留用光伝授、蔣叔輿編次。
- (4) 『靈宝領教濟度金書』(『道藏』第一三〇冊)、北宋、寧全真伝授、南宋末元初、林靈素編次。

道藏研究の専門家、陳国符教授の指摘によると、上記のうち、金允中の『上清靈宝大法』は、江東、江西地域の科儀、留用光の『無上黄籙大齋立成儀』は江南、江浙地域のもの、林靈素の『靈宝領教濟度金書』は浙江西北部地域のもの⁽¹⁾とされるが、最も古い『黄籙九幽醮無碍夜齋次第』だけは、宋代の成立と推定し得るのみで、その通行地域については手掛りがなく、不明であるとする。編者不明ということが推理の上で大きな障害となっているものと思われる。

しかるに筆者は、南洋各地の中元普度の事例を調査している中で、シンガポールの福州系道士及び莆田仏僧の普度科儀の構造がこの『黄籙九幽醮無碍夜齋次第』に記される儀礼体系とよく一致することを発見した。もしこの類似性が確認できれば、従来不明とされてきた『黄籙九幽醮無碍夜齋次第』の通行地域を福建特に閩北地区を中心に想定することが可能になると共に、閩北普度の上に成立している福州―莆田系目連戲或はそれと同系の江西目連戲の成立年代をこの『黄籙九幽醮』成立の宋代(北宋)にひきつけて想定することも可能となる。それには、先ず何よりもこの両者の類似性を検討することが必要となる。そこで、以下では『黄籙九幽醮無碍夜齋次第』と、シンガポールの閩北系普度科儀、福州道士と莆田仏僧の普度儀礼とを比較し、その構造、発想の類似点を探ってみることにしたい。

先ず、『黄籙九幽醮』の儀礼構造を概観しておく。この儀礼は、死者に対する功德儀礼で、おそらく死後、五七日、

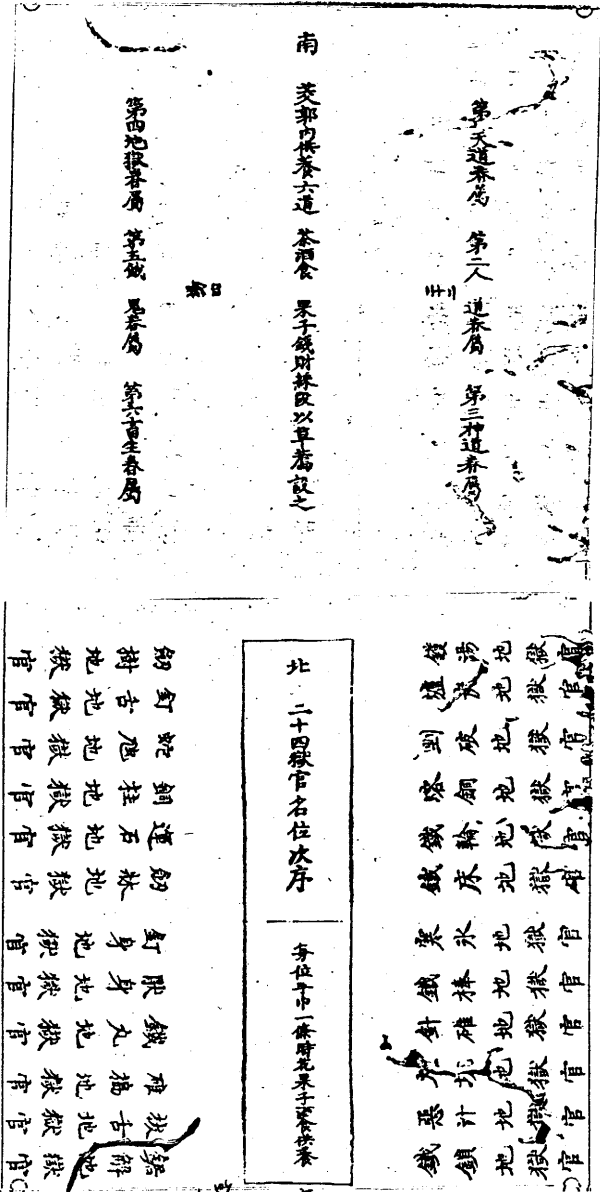
或は七七日に行なわれる比較的大規模な功德法事を内容としていわれる。一日半の規模で、現今、台南の功德の所謂「一朝宿啓」に当たる。第一日は午後おそく四時頃に開始して午夜の前に終り、第二日は凌晨から始めて午夜過ぎに至って終るのが台南の形であるが、『黄籙九幽醮』もほぼ同じ形として理解できる。

先ず、道藏所収の『黄籙九幽醮無碍夜齋次第』のテキストに附載される場地平面図に基いて、全体の配置図を描いて示す。道藏にのせる祭壇全体の図(図1)と祭壇の下方に配した六道位牌と獄官の詳細図(図2)を合併し、全体の構造を一つの図にまとめて示すと図3のごとくなる。

これを見ると、北にあって南面する正座の三清壇を中心に、左右奥に救苦天尊十二位の画像を掛け、その前方の向かって左側面(西)に酆都大帝・張天師・經籙度法師(三師)の画像、同じく右側(東)に五獄大師・三官大帝・玄中大法師(玄天上帝)の画像を掛ける。酆都大帝と五獄大帝は地獄の主宰者として、三官大帝は天・地・水三界のそれぞれの支配者として何れも亡魂の処置を決定する権力者として来臨し、上席を占める。張天師・三師・玄中大法師(玄天上帝)は、道法の保持者として、亡魂の救済に当たる道士団の祖師であり、道士を督励して法事を執行せしめる監督者、保護者として迎えられている。以上の三清殿を内壇として、すぐ外側(南寄り)に一段降って草蓆の匣(茭郭)を設け、ここに六道に呻吟する齋主の眷属の位牌を祀る。既に死去した数多くの眷属の亡魂は、六道の何れかに停滞していると予想されるので、各道に位牌を配置して奉祀する。また、その中央には、「天橋」を置く。この醮齋を通して、六道にさまよえる眷属の亡魂を救い出し、天橋を通して天界に導くのが目的だからである。

次に、この内壇、六道壇とはるか南に向かい合って北面する位置に九幽地獄を設ける。黄土の土盛りで九個の灯蓋を置いて点灯し(図2)、中心に竹竿を立て黄幡を懸けたものを、九つの方向にそれぞれ一つずつ配置して九つの地

図 1 黄録九幽醜図 (原図A)



閩北の普度と目連戯

図2 黄録九幽醜図 (原図B)

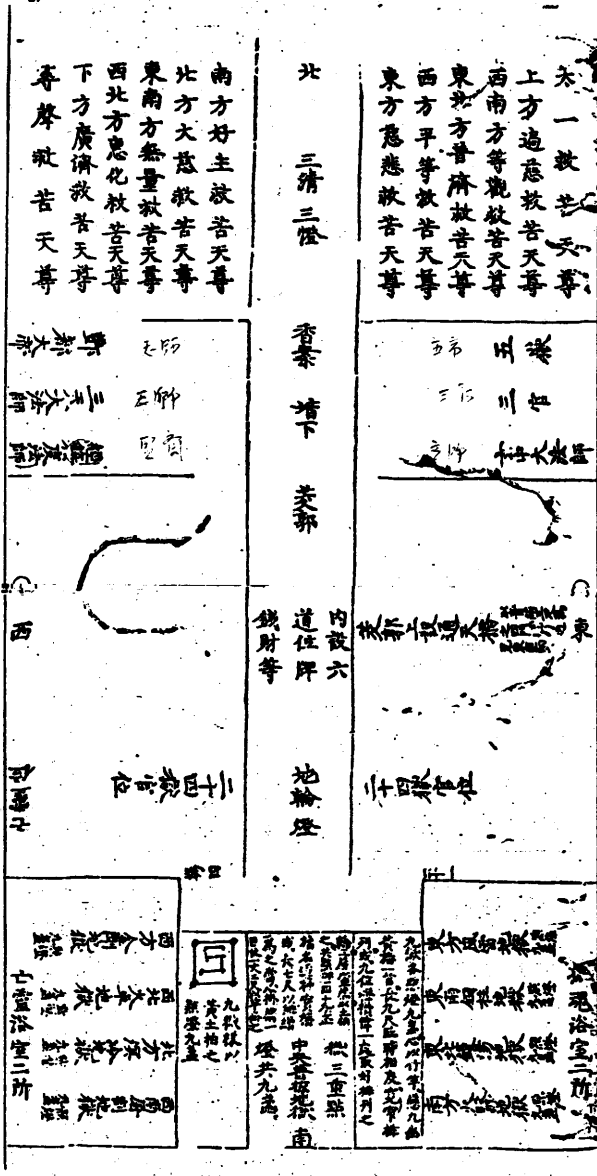
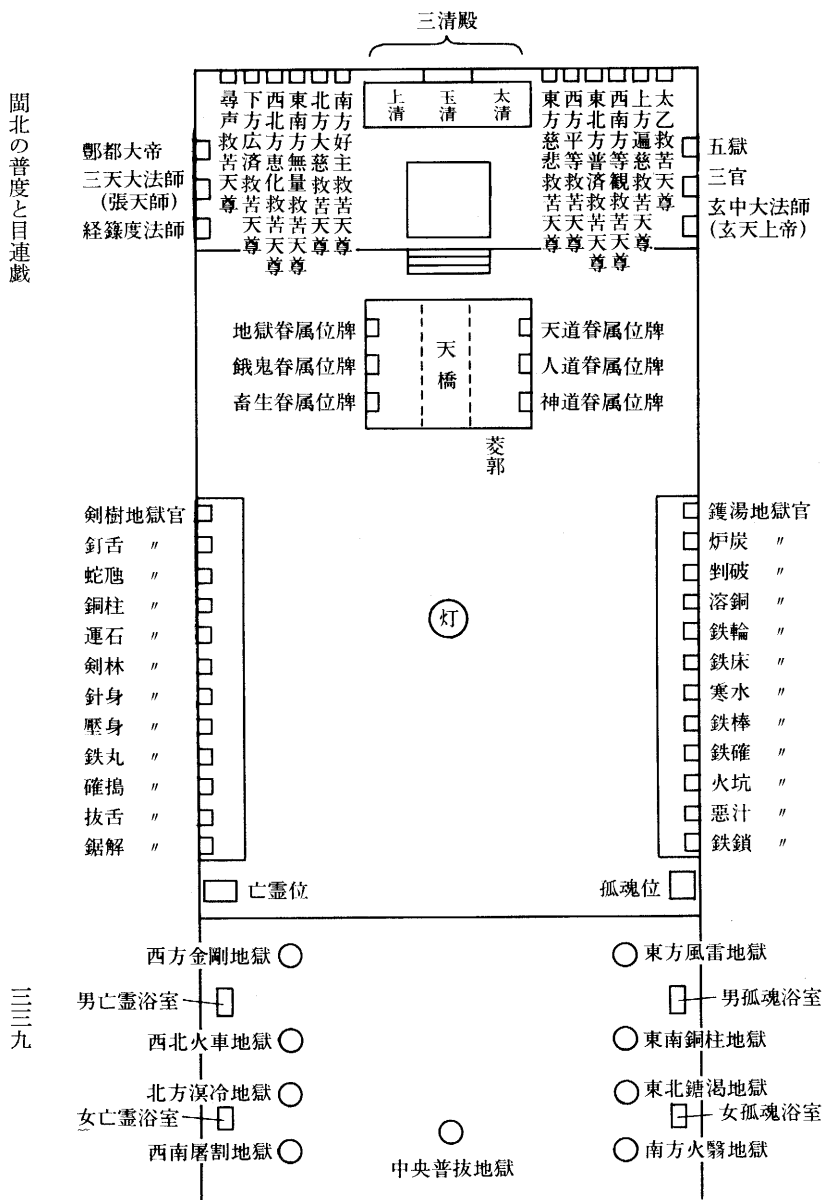


図 3 黄籙九幽醮場地図 (綜合図)



獄を現わす。蓋は合計四十九個あり、亡者は死後四十九日の間、この蓋（地獄の門）を一日一門ずつ渡って行くことになる。この九幽地獄の前方北寄りに獄官二十四人の牌位を左右に十二ずつ並べて、獄官が伺候していることを示す。この獄官の背後には、内壇に向かって左（西側）に亡霊の位牌をおく。右（東側）には孤魂の位牌（寒林所）が置かれている筈であるが、図では欠している。九幽地獄の背後、西側には亡霊沐浴所が置かれて、亡霊位と対応しているから、同じく東側に置かれた孤魂沐浴所には、これに対応して亡霊位と対称の位置（即ち東）に孤魂位が設けてある筈だからである。但し、孤魂位は特に設けず省略しているのかもしれない。

全体としてみると、北端に神々、南端に九幽地獄と獄官が居り、中間に亡魂（主薦）、眷属（追薦）、孤魂（附薦）の三類の靈魂が招致され、地獄の裁判を受けた上で、六道の何れかに配されるという構造に作られている。靈魂としては、最終的に天橋を渡って天道に入ることが理想ではあるが、六道の何れにおちつくかは、天界の神々と地獄の神々の判断で決まる訳で、道士団とその祖師は、その間に斡旋して亡魂達をできるだけ天界に赴けるよう、法事を執行するという役割を受けもつ。この図は、このような『九幽醮』の構造をよく反映しており、古文獻としては珍しく詳細で貴重なものであるが、後世のものに比べて『地獄』の設営が大きく周到である点が目立つ。現在の超幽建醮や功德法事の設営には、地獄は「十王図」を掛ける程度ですませているのに、この『黄籙九幽醮』が九幽地獄それぞれに門（蓋）や旛を備える設営をするのは、「地獄破り」の儀礼のためと見られる。その点では、現在の各地の中元建醮や法事での「打城」や「破地獄」の設営に近いと言えようが、九つも地獄を作り、二十四位もの獄官を並べる例は、他に類例を見出し得ない。超度儀礼が出現した当初の時代の、民衆の地獄に対する恐怖心を反映する威赫的な設営と云えよう。

さて、次に、この『黄録九幽醮』の科儀の内容を、道藏テキストの叙述に副って要約して表示してみると、表1のごとくである。

表1 黄録九幽醮無碍夜斎科儀表

日	時	刻	科儀	小節内容
第一日	午后	四時	開壇 引魂 過橋 懺悔 関灯 説戒	開闢 安座、啓堂、宣告 拜九天 拜三宝
第二日	凌晨 午前 午後	二時 十一時半 六時(初更) 八時	行道 行道 午供 散壇	早朝 午朝 送三師 休息
			沐浴 煉度 捲簾 冠帶 度魂 過橋 授符	聽法、九真戒

以上の表のうち、□で囲ったものは、現今の閩系功德法事でも行なわれているものである。従って、現在、台湾やシンガポールの閩系集団の功德法事(閩南系、海南系)と骨組が類似しているが、第二日の午夜に入る前に主薦、追薦の功德が略々完了したあと、孤魂に対する超度を大規模に行なう点が大きな特色であろう。超幽の内容も沐浴―法水―散花―光明頌などを列ねて周到であり、最后には、主薦、追薦、孤魂を包括して大規模な“破地獄”を行なう。これは個人の死者(主薦、追薦)に対する功德(私祭)というよりは、孤魂超度のために村落全体で行なう「建醮」(公祭)に近い。前述のように、場地の設営において、二十四獄官、九幽地獄などを盛大に配置したのは、この“破地獄”儀礼の演出を際立たせるためのものであったと想像される。

この“破地獄”の儀礼について、『黄録九幽醮』の記載は

給牒		給九幽壇牒
十真礼	三塗苦	
法食		
焚符		
超幽		
召孤		
沐浴		
法水		
散花		
召筵		
光明頌		
破獄	未央偈、九幽苦神頌	
焚燒錢經	救戒儀、往生頌	
亡靈		
孤魂		
九幽醮		
送靈		
焚表	行道、啓堂、宣設醮儀	

簡略で詳細は知り得ないが、先ず、「救苦真人」が地獄をめぐって、その惨状を見聞し、これを救苦天尊に報告すると、天尊が法師を遣わして、地獄を破り、亡魂を救出するという骨組で行なわれたらしい。例えば、救苦真人の地獄めぐりは次のように述べられている。⁽²⁾

是の時、即ち救苦真人あり、上して天尊に白して曰わく；臣、幽陰地獄の内、羅鄴北府の中を覩るに、一切の亡魂、沉淪して苦を受け、或は劍樹に攀じ、或は刀山を踐む。碓に搗かれ磔に磨せらる。鑊湯に爐炭あり、肢体零壊し、膏血交々流る。万たび死し千たび生く。昼夜を捨かず。其の間に独り一人あり、形容に畏るるなく、巡り履むも傷つくなし。獄中を往来して、苦も害する能わず。祥光端然、其の身を覆護す。此の人何の善果あるやを審かにせず。

天尊言う；善きかな！ 善きかな！ 此の人、在生の日に在りて心に大道を奉じ、志に善縁を慕う。曾つて九真の妙戒と救苦の真符を受け、靈文を佩負し、心に持して怠ら弗るに縁り、所以に死魂は快樂にして自在に逍遙す。地獄の中を経ると雖も、輪廻の苦を受けず、名を黒簿より削られ、長く光明を覩て、即ち南宮に昇上し、克

く仙果を証するを得たり、と。

このように救苦真人が地獄をめぐるその惨状をのべ、天尊が善果を得たもののみが救苦を得ることを諭したのち、法師に「破獄」を指示する。これを承けて法師は、「破獄」に赴く。これについて、道蔵テキストは次のように記す。⁽³⁾

法師は道衆と与に、茭郭を巡遊し、光明頌を吟ず…(略)…

…

次いで地獄官の位に往き、二十四地獄を破る。(原注：文は別巻にあり、位ごとに破り、旋いで旛子を除き、位牌を掲ぐ)。

次いで茭郭の南門に入りて穿入して起つ。

これによると、九幽地獄の蓋灯のみならず、左右両側に並ぶ二十四の獄官の位牌を旛子と共に破り除去する演出を行なっている。破り終ってから、茭郭をくぐり抜けるのは、地獄を破って内に閉じ込められていた亡魂(主薦、追薦、孤魂など)を救出し、これを接引して、地獄道↓餓鬼道↓畜生道を経て神道↓人道↓天道の方に誘導して最終的に天道に導く形をとっているものと思われる。

以上が、『黄錄九幽醮』の大意であるが、その中心が「破獄」にあることは明らかであろう。

なお、『黄錄九幽醮』は、前述のように孤魂について位牌を作っているか否か、はっきりしないが、少くとも孤魂を非常に重視し、科儀書の中でこれをランク別に分けてその非運を吊っている、次の通りである。⁽⁴⁾

(1) 其れ英雄ありて国を佐け、忠赤もて君に事う。危に逢いて一身を顧みず、命を致して乃ち万乗に酬ゆ。沙磧に

歿し戰場に死す。骨は未だ痊癒せられず、魂は方に沈滞す。(英雄)

(2) 或は即ち官を万里に効し、命を四方に馳す。疫癘に染りて以って卒に終り、傷害に遇いて横ざまに夭す。関源に阻まれ、閭里に賒さる。春夏秋冬、祭祀より絶す。(文臣)

(3) 或は名を上国に投じ、東西に商賈す。山川を跋履し、江海を泛渉す。毒蟲に遇いて命を害し、狂浪に遭いてて舟を摧かる。(商人)

(4) 或は幼にして空門に入り、長く釈教に依る。孤り林泉の裏に隠れ、遅れて巖谷の中に栖む。志して修行を慕い、自ら寂寞に甘んず。或は遊客と為り、或は化縁を掌る。荏苒として傾き亡び、因りて遷化に循う。(僧侶)

(5) 或は情に凡俗を嫌い、心に仙郷を楽しむ。清閑養素の名を全うし、碧嶂出塵の界に居る。未だ長生の理を遂げられず、短景の期を逃れ難し。(道士)

(6) 或は工は丹青に妙にして、芸は楽術に妙なるあり。因りて茲に遊歴し、他郷に客死す。(工匠)

(7) 或は力を往還に効し、身を駆役に備す。或は冤ありて暗に害せられ、或は告ぐるなくして以って自ら残す。魂魄飛揚し、依るなく倚るなし。(雇役)

(8) 或は狂徒、劫盜、逆党、叛臣と作り、国に負きて以って自ら甘んじ難く、陰冥に墮ちて敢えて恨む。(逆徒)

(9) 或は神理を欺慢し、或は父孃に孝ならず。天譴を受け以って滅俎し、罪責を犯して殞を致す。(犯罪者)

(10) 或は貧に困りて寒え餓え、或は法を避けて以って逃げ藏る。計窮まりて自ら山林に尽き、事急にして身を河井に投ず。(自殺者)

(11) 或は虎狼に啗食せられ、或は水火を以って漂焚す。(横死者)

以上のごとく十一類の孤魂群を類別して列挙したのち、更にあらゆる孤魂に対して

是れ女なると男なると、少なると老なると、名姓を知る莫しと雖も冀わくは相率いて俱に來たれ！⁽⁵⁾

と呼びかけ、広く普度の手をさしのべている。この種の孤魂のリストは、この『黄録九幽醮』に続くの他の『超度』科儀書、即ち『上清靈宝大法』、『無上黄録大齋立成儀』、『靈宝領教濟度金書』などにもあるが、この『九幽醮』のものが最も古く素材である。特に「英雄」を冒頭に出す形は最も古い村落儀礼を反映しているものである。これだけ多くの孤魂に網羅的に救済を与えるのは、個人の亡霊の超度科儀というよりは、村落レベルの孤魂濟度、中元建醮や祈安建醮の科儀という印象が強い。地獄を大規模に設営して、しかもこれを打ち破るところを見ても、一個人の超度というよりは、村落の建醮祭祀を反映するものと見るべきであろう。

二 シンガポール福州公建普度の儀礼構造と『黄録九幽醮』

さて、上記の『黄録九幽醮』について、道教研究の専門家、陳国符教授は、その論文「道教音楽源流考（稿）」において、「どの地域で行なわれた科儀かは不明」とされながらも、時代としては「宋代のものであろう」と推定されている。通行した地域がわからない点が問題となるわけであるが、筆者が調査した香港の広東人、潮州人、海陸豊人、シンガポールの泉州人、漳州人、福州人、莆仙人、海南人、潮州人、タイの潮州人、台湾の泉漳人、客家人など閩粵系諸エスニック・グループの中元建醮や功德法事の中では、福州系の科儀が奇妙にこの『黄録九幽醮』に酷似するという事実がある。例えば、シンガポールの Jorong 一〇八巷の順天宮に設けられた福州公建普度社が毎年農曆七月廿

日一廿二日に挙行している「中元建醮」は、その場地設営、科儀内容の双方にわたって、上記の『黄籙九幽醮』のそれと極めてよく似ている。以下、先ず、これについて分析してみる。

この中元建醮は、この順天宮（臨水夫人廟）に属する福州人集団（福州公建普度社）の同友の物故者のうち、後嗣を欠く孤魂を主薦とし、後嗣を有するものを附薦として行なう。

場地は、順天宮に附置された社屋を中心に Torong 一〇八巷の路上を広く占拠する形で神棚、醮棚、普度棚、傀儡棚などを架設して構成される。図のごとくである（図4）。

中心は路上の内壇（三清殿）である。三清画像、三官大帝像を主壇に奉祀し、文昌帝君と呂祖真人、玄壇元帥と岳飛、張天師と玄天上帝を対面して左右に配する。入口の左右に地獄図を掛ける。祭壇前方に主薦の六道孤魂（社友眷属）と、附薦の社友各姓の歴代祖先の靈魂を祀る。

主壇からかなり下った位置に主薦孤魂の人形（替身）と、附薦眷属の人形を対面させて二列に並べる。

順天宮の前の空地に、地獄の裁判所、陰陽司の殿を造り、中に文官、武官の像を置き、更に左右両側に無常使者、獄吏の画像を掛ける。この両側には男女の沐浴室を据える。これに対面して都城隍殿、監齋使者像（観音大士）、目連画像を並べる。この空間は地獄と獄吏、獄官の世界を構成していると言える。

別に路上の主壇前方には紙船、普度棚、往生橋が位置を占め、更に離れて主壇に対面して、木偶戲の戲棚が架設される。

ところで、この場地設営は路面の幅員の半分しか使えないという地形上の制約のために、本来の形から変形されていると見られる。例えば、陰陽司を中心とする地獄空間は、本来、救済者の三清殿と対面すべきものであり、観音大

図4 シンガポール福州公建普度場地図

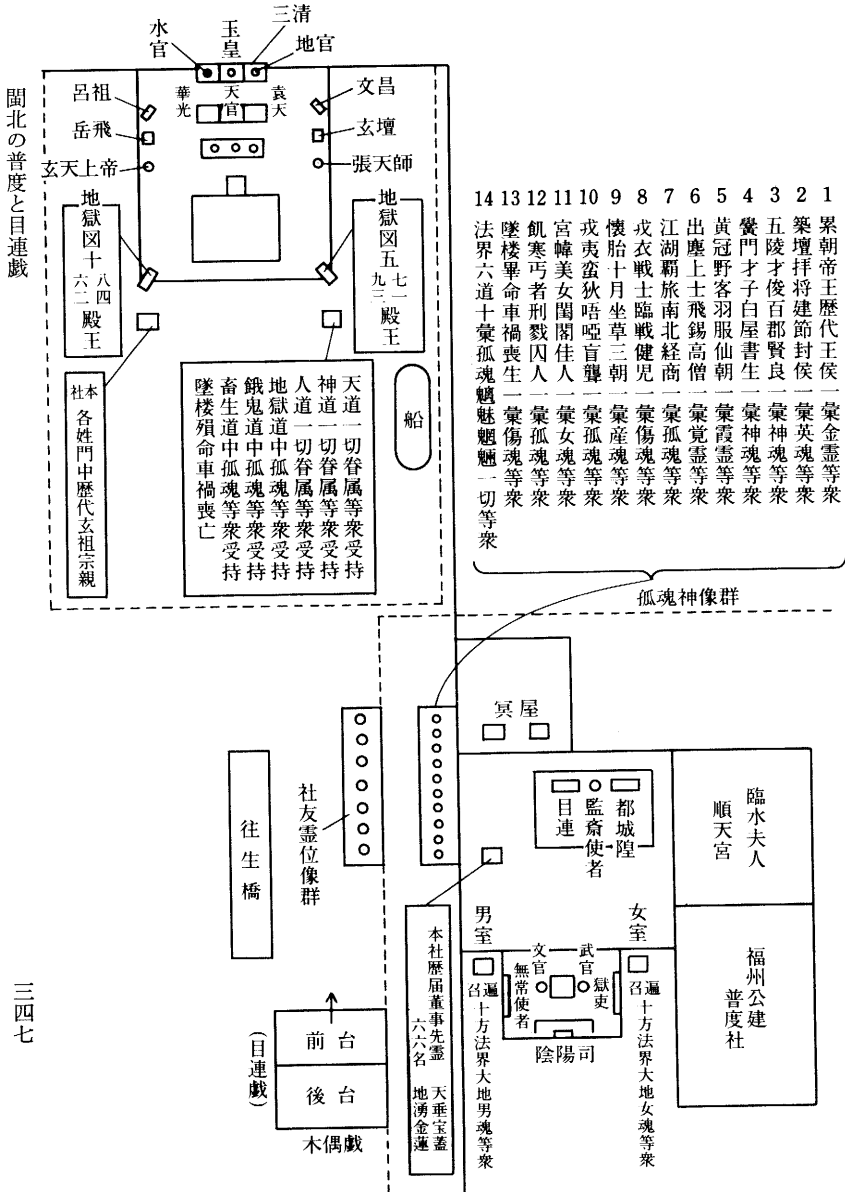
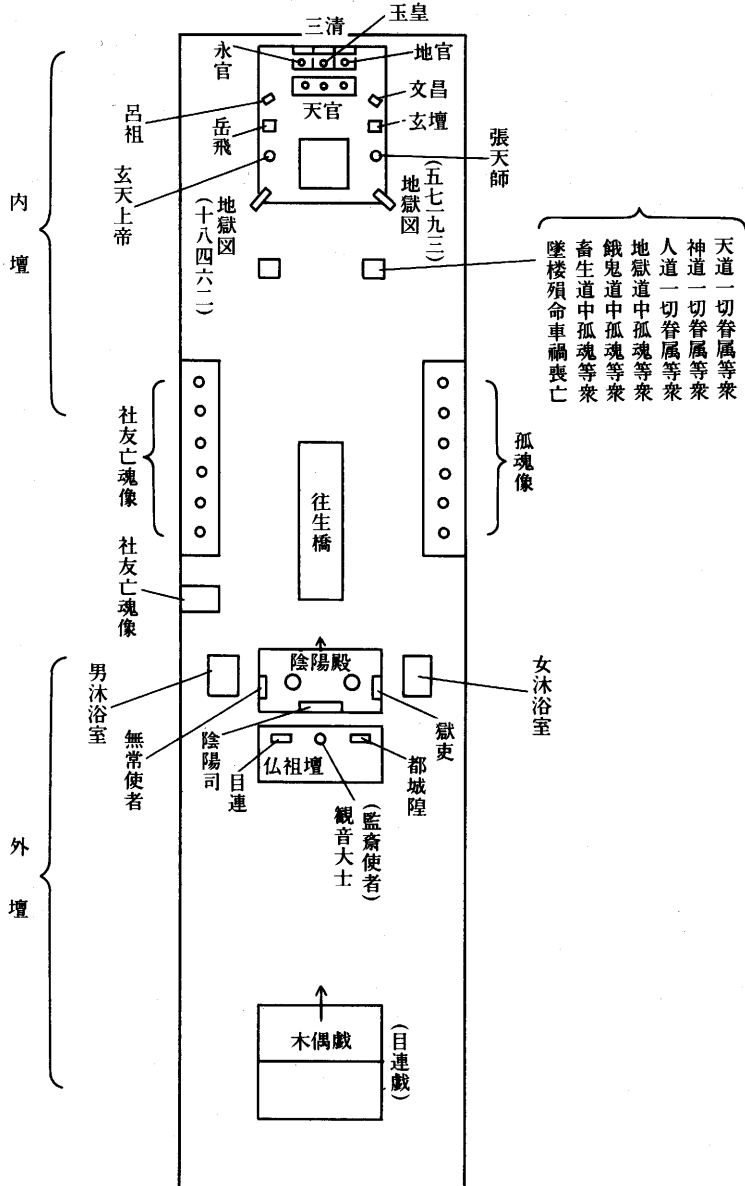


圖 5 福州公建普度場地修正圖



士(監齋使者)や目連など孤魂の救済者は、台南、台北の建醮祭壇の仏祖壇に当たるとすれば、三界壇系の陰陽司の裏側に背を向けて外壇を構成しなくてはならない。また、孤魂群の替身人形群と亡魂の替身人形群とは、左右の幅員一ぱいに分かれて対面するのが自然である。男女沐浴室も幅員一ぱいの空間をはさんで左右に対置すべきものと言える。別に木偶戲棚は、仏祖壇と対面する位置に遠くはなれて設置されるべきものであろう。

5)。以上の変形を修正したとすると、場地の配置はかなり体系化される。今、その図を示すと次図のごとくである(図

5)。さて、今、この図5を『黄籙九幽醮』の場地を示した図3と比べてみると、構造上、非常によく似ていることがわかる。次のごとくである。

(1) 内壇の配置

三清殿内には双方とも三官大帝、張天師、玄天上帝の三者が奉祀されている。また六道(天道、人道、神道、地獄道、餓鬼道、畜生道)の眷属、孤魂の牌位も双方に殆んど同じ名称で置かれている。

(2) 外壇の配置

双方とも三清殿と遙かに対面する位置に地獄が設置されている。図5の陰陽司を中心とした空間は、図3の九幽地獄に当たる。図3の二十四獄官の位は図5では簡略化され、内壇入口の左右地獄図に変形してしまっているが、位置関係は対応している。

また図3の亡霊位、孤魂位は図5では数がふえているが、東西(左右)の側面で対面する配置は、略々対応している。図3の男女沐浴室は、図5では四つから二つに減っているが、位置は変わっていない。

表2 黄籙九幽醮・福州普度科儀対照表

黄籙九幽醮		福州普度科儀	
日	時	日	時
第一日	午后	第一日	午前
開壇	引魂	開啓	
過橋	懺悔	三宝懺	
懺悔	関灯	午供	
煉度	沐浴	午供	
捲簾	散壇		
冠帶	午行道		
度魂	行道		
授符		法水	
給牒		晚課	
十真礼		施食(小幽)	
法食			
焚符			

この他、天橋の位置が図3では六道牌位に密接していたのが、図5では地獄の前に置かれている。しかし、場地空間の中央に位置を占める点は変わっていない。

以上のごとく、図3と図5とは、配置の発想が共通している。特に六道孤魂、眷属の名と位置が一致し、地獄系統の主管や属官の位置、亡霊、孤魂の位牌替身の位置なども殆んどが対応しているから、この福州公建普度の場は、宋代の『黄籙九幽醮』をモデルとして設営されていると見てよいであろう。

道士の陳大範師は、同じシンガポールの莫律(Mande Rd.)でも普度科儀を行なっているが、その設営では地獄図をかけず、孤魂替身、亡魂替身も省略されていて、『黄籙九幽醮』との対応関係は明らかでなかったが、このJorong 一〇八巷の順天宮普度の場合は、その対応が極立っている。

超幽	召孤	沐浴	法水	散花	召筵	光明頌	破獄	焚燒錢綵	亡靈用	孤魂用	九幽醮	送靈	焚表
超幽	青玄小讀	拔苦拔罪妙經	說玄玄妙經	上座科	太上老君說清淨妙經	破獄咒	送聖玄科						

他のエスニック・グループの普度場地も多く観察したが、これほど宋代の『黄籙九幽醮』に似ている例は見出だし得なかった。到底、偶然の一致とは思えない。

次に、『黄籙九幽醮』と福州公建普度の科儀の構成、その小節目などを比較してみよう。両者の科儀の秩序を対照させて表示してみる(表2)。

この表では、福州普度の方が一日で終る関係で時間が短かいたためであろうか、特に前半での科儀の欠落(省略)が目立つ。しかし、後半、特に夜に入ってから、施食、超幽、破地獄など、大きな科儀は対応している。

特に重要な破獄の部分と比較すると、前述のように『黄籙九幽醮』では、法師がここで二十四獄官の位を破るというダイナミックな科儀を示すが、福州普度では、「地獄」を実際に壊すような科儀はなく、ただ道士が「破獄咒」を唱えるだけである。ただし、その破獄咒は、「九幽地獄」を破ることを内容としており、『黄籙九幽醮』と同じ発想に立っている。次のごとくである。

菩薩鄴都中、重重金剛山、靈宝無量光、調照炎地煩、九幽諸罪魂、身随香雲幡、定慧青蓮花、上生神永安、功德金色花、微々間幽因、華池流真香、蓮蓋随雲□、千靈洞元和、常居十二楼、急宣靈宝□、自在天堂逝、寒庭多

悲苦、回心礼元□、女青靈宝符、中山玉帝書、一念昇太□、二念帰太無、功德九幽下、旋生紫雲、
 場地の構成としては十王地獄圖を掛けながら、破獄の科儀としては「九幽地獄」を観念しているわけで一つの矛盾
 と言えるが、これはこの福州普度が『黄籙九幽醮』の血脈を引いている証拠になろう。

事実、福州普度の科儀書の文には、『黄籙九幽醮』の科儀文と一致する部分がある。例えば、さきにふれた『黄籙
 九幽醮』の「破獄」の場面で法師が破獄の前に吟ずる「光明頌」の句が、福州普度の「上座科」の科儀の中に略々同
 文の形で入っている。対照して示す。

黄籙九幽醮	福州科儀
太上大道君	太上大道君
位処無為郷	位列無何郷
宝光真童子	宝光真童子
下理九幽房	下濟九幽魂
悲嗟苦魂役	悲嘆苦魂没
拔度痛哀傷	拔度痛哀傷
二十四門戸	二十四門戸
威令聞宝香	威令聞宝香
灯明照長夜	明灯長夜照
願消累劫殃	願消黒薄殃

若干、異同があるが、福州科儀の方が伝写の誤りを犯していると見られる。

次に、破獄のあと、法師が荖郭の南門に入つてこれを穿り抜け立ち上つてから唱う「未央偈」三首も福州科儀の

〔施食科〕に撰取されている。次のごとくである。

黄録九幽醮	福州科儀
<p>九幽黒闇那堪往 到者雷同是罪魂 冥々難得見光明 太上慈尊來救度 大慈大悲尋声救苦來 無上尊！</p> <p>餓鬼窮魂皆解脫 冤家債主総懺心 刀山劍樹悉摧鋒 爐炭鑊湯俱滅盡 大慈大悲尋声救苦來 無上尊！</p> <p>構置冤憎生地獄 廻心懽喜是天堂 至尊威力不思議 願皈依慈光宣教戒 大慈大悲尋声救苦來 無上尊！</p>	<p>九幽黒暗那堪往 墜者雷同是罪魂 冥々難得觀光明 太上慈尊來救苦</p> <p>滯魄窮魂皆解脫 冤魂債主総歛欣 刀山劍樹悉推鋒 爐炭鑊湯消德焰</p> <p>結垢怨憎生地獄 回生歛喜是天堂 至尊威力不思議 願皈依慈光宣告誠 皈命大慈大悲尋声救苦來 無上天尊</p>

ここでも福州科儀は『黄録九幽醮』を襲いながら、欠句や誤字を見せる。

このあと、黄録九幽醮の法師は、菱郭の北門を出て〔九幽苦神の頌〕を唱うが、福州科儀の〔上座科〕に対応する

閩北の善度と目連戯

文が見える。次の通りである。

黄錄九幽醮	福州科儀
生落苦神界 転輪五道停 九幽長夜閉 累劫無光明 (中略)	生落苦形界 転輪恋道中 九幽長夜閉 累劫無光明 (中略)
廻風揺長夜 哀響流寒庭 上有履山魂 時刻無停寧	悲風飄長夜 安亨流寒庭 尚有履三魂 時刻不暫停

ここでも同じ傾向ながら、対応は明瞭である。

以上のごとく、超幽一破獄の重要な部分の文言が同文ということになり、両者は同系のものと断定し得る。

以上、場地の構成、科儀の発想、重要科儀書の文言の一致など、何れの角度からみても、この福州普度科儀が宋代の『黄錄九幽醮無碍夜齋次第』の流れをくんでいることは疑いない。

三 シンガポール莆仙同郷会逢甲普度の儀礼構造と『黄錄九幽醮』

次に福州と同じく閩北グループに属する莆田、仙游県（興化府）人の普度儀礼を検討する。このグループの普度の

うち、仏教系のものが『黄籙九幽醮』に類似する。例えば、シンガポールの小坡から近年、アッパー・トムソンロードに移転した九鯉洞と称する莆仙人の廟では、シンガポール居住の全莆仙人が組織の総力をあげて、十年に一回（甲の歳）、「逢甲普度」と称する大規模な普度を挙行している。近年では一九八四年農曆七月初二日より初八日まで挙行された。道士団と僧侶団と双方を何れもマレーシア・マラッカから招いているが、特に仏教系が主体となって挙行している。以下、『黄籙九幽醮』との類似点をあげる。

I 目連戯、目連超薦の場地構造

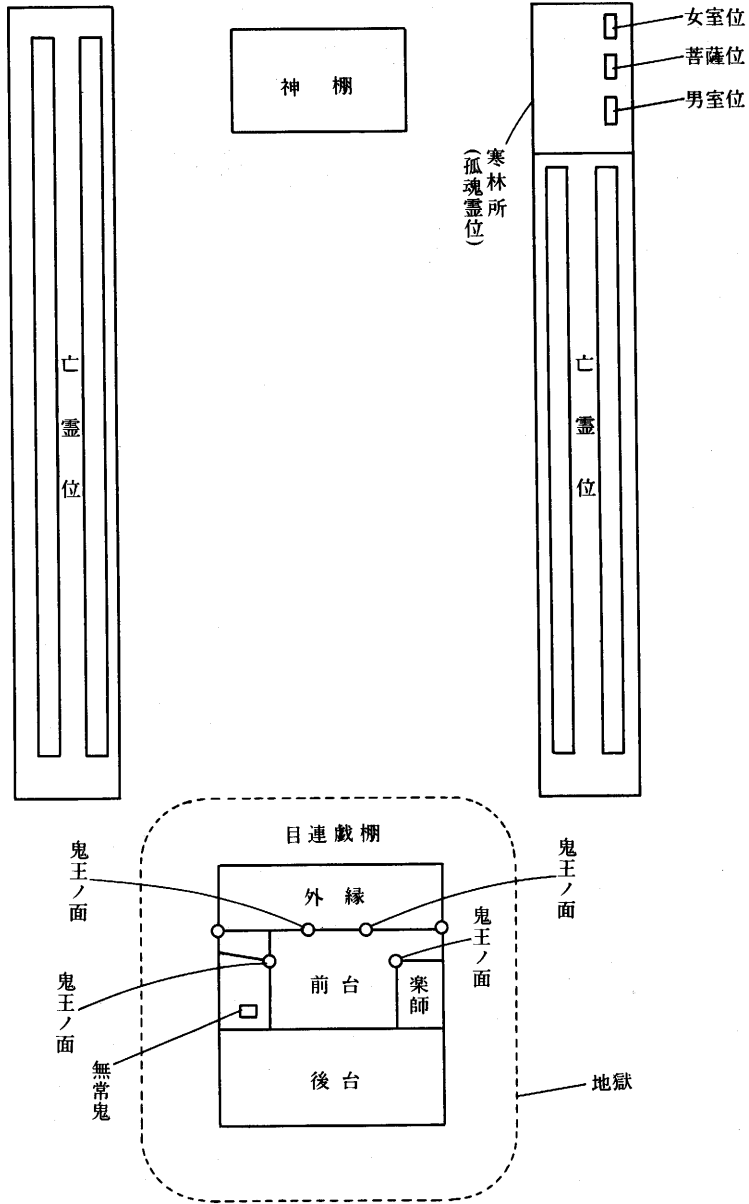
先ず、九鯉洞の隣接空地（叢林）に作られた目連戯の戲棚の配置を示す（図6）。

この図は、目連棚を地獄に当たると解した場合、さきの『黄籙九幽醮』の配置図（図3）によく似ている。目連棚は正面前方の四つの柱の上方に鬼王の首（仮面）を掛け、後方に無常鬼像を配していて、明らかに地獄の形である。

目連戯はすべてが必ずしも地獄を場面としている訳ではないが、この形は地獄の場面だけを考えて作っていると云える。目連による“地獄破り”の舞台を設定した形であり、九幽地獄、二十四獄官を南端におき、神棚を北端に置く。『黄籙九幽醮』の配置（図3）と同じである。また西側に亡霊位、東側に孤魂位を置くのが図3の配置であるが、図6でも孤魂位即ち寒林所は西側にあり、亡霊位は東側にある。西側にも亡霊位があるが、これは東側の亡霊位からの延長にすぎない。従って、全体としてみると、図6は図3と全く同じ発想で作られていると言える。

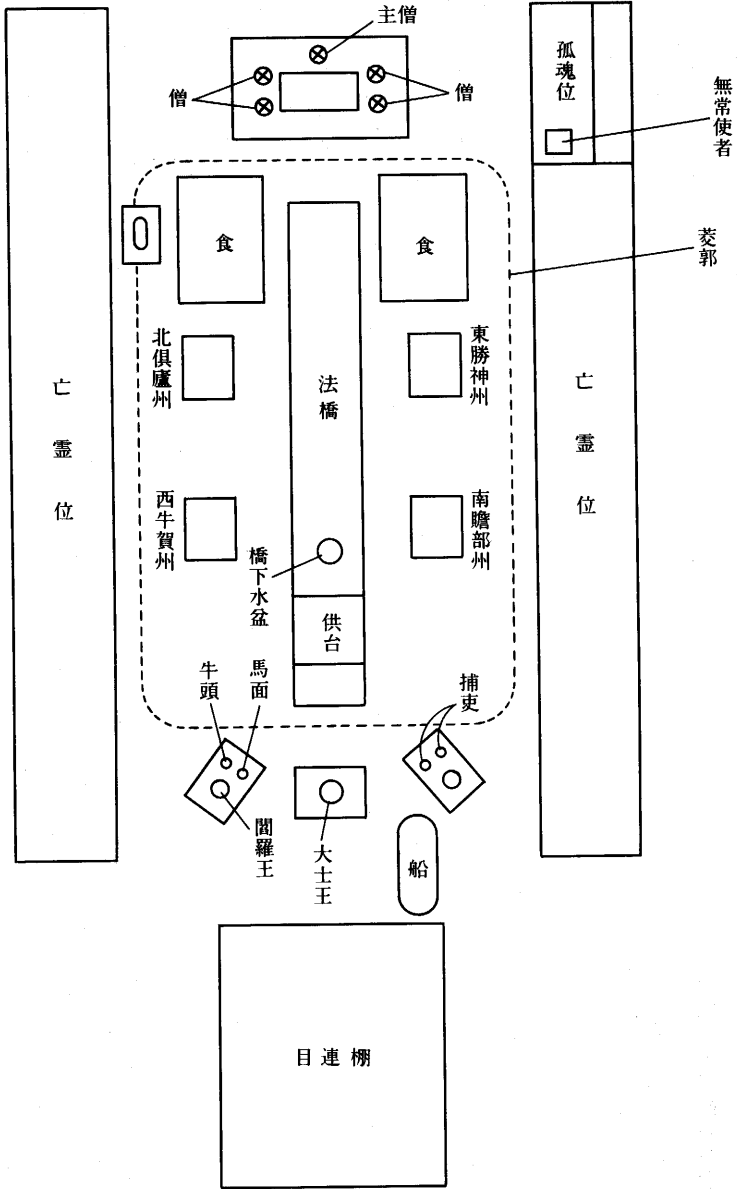
また、この場地をバックとして挙行される目連戯は三日間、毎日朝九時より夕方五時まで、連続上演（連演）の形で演ぜられるが、観客は殆んどなく、両側の亡霊位と孤魂位の超度のために挙行する儀礼としての趣が強い。そのクライマックスは、第三日夕刻、即ち目連戯の終末近く、目連が地獄を破りながら第六殿で遂に母にめぐり合う直前

図 6 莆仙逢甲普度，目連戲場地図



にある。この時、目連が地獄の門を錫杖で破るたびに内から多数の亡魂群がとび出してくる演出が数回くりかえされたのち、一時、劇の進行を中断して、台下左右の亡霊位の一つ一つを目連が超抜済度する儀礼を行なう(目連超薦⁽⁸⁾)。このときには、九鯉洞の主神盧土元の神像を神棚下に運び、神棚上の卓上に扶鸞の道具を置き、「目連超薦」を受けようとする亡霊位の眷属遺族の順番を扶鸞できめる。遺族はきめられた順に従い、亡霊位牌と亡霊のカタシロである衣服を台上の下手の地獄の門前に控える亡魂の替身の役(少年達)に手渡す。これを受けとった少年(亡魂役)は、前台中央に錫杖をもって立つ目連の前に進み出て跪坐し、衣服を肩にかけ、目連のさし出す竹の先の紐に手ですがる。目連は錫杖で台上に咒符を書き、超抜の咒文を唱えて竹の先を上へ釣り上げるようにして少年を引き上げて救う形を示す。これにより遺族は自らの親族の亡霊が地獄から目連の手で抜度されたことを確認する。これを亡霊一人ずつについて行なうため、約三時間を要する。これは、「地獄破り」の科儀に他ならない。第一日、第二日、第三日と目連棚上に演ぜられてきた目連戯は、実はこの「目連超薦」即ち「破獄」のための予備的手続にすぎなかったことになる。これが終って、目連戯の本題に帰ると、すぐに目連が母とめぐり合い、ついで母は狗に姿を変えられ、これを超度するための「三和尚打斎」となる。この方は、孤魂を救う儀礼である。従って、右の「目連超薦」以後の台上の上演は、殆んど「破獄」の延長で、これを「三和尚打斎」の孤魂済度でしめくくった形になる。これは、『黄籙九幽醮』で法師が二十四獄官位を破る演出を引き継いで拡大したものと言える。莆仙逢甲普度は、『黄籙九幽醮』の破獄儀礼を、仏教的に修正しながら(救苦法師を目連に改め、超孤打斎の主役を経録度三師から三和尚に改める)、継承したものと解し得る。福州道士の普度科儀では、『黄籙九幽醮』の「破獄」は道士の「破獄咒」として簡略な形で継承されたにすぎなかったが、莆田、仙游では「破獄」を「目連戯」にまで発展させたと言える。

図 7 莆仙逢甲普度過橋場地図



次に、以上の「目連超薦」、「三和尚打齋」の終了したのち（即ち目連戲終演ののち）、晩刻八時すぎに同じ場所で、仏僧五人が来臨して、「過橋」の科儀が行なわれる。⁽⁹⁾この科儀に先立ち、場地内には、目連棚が役割を終え、中央の空間に「法橋」が設置される。目連棚上の「無常使者」は、寒林所に入り、新たに大土王、閻羅王、往生船が目連棚下に据えられ、天橋の両側に四方世界、亡霊孤魂用の施食台が配置される（図7）。

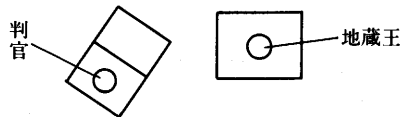
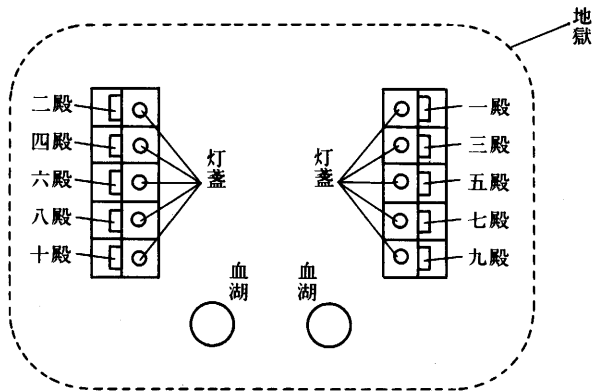
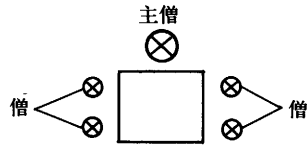
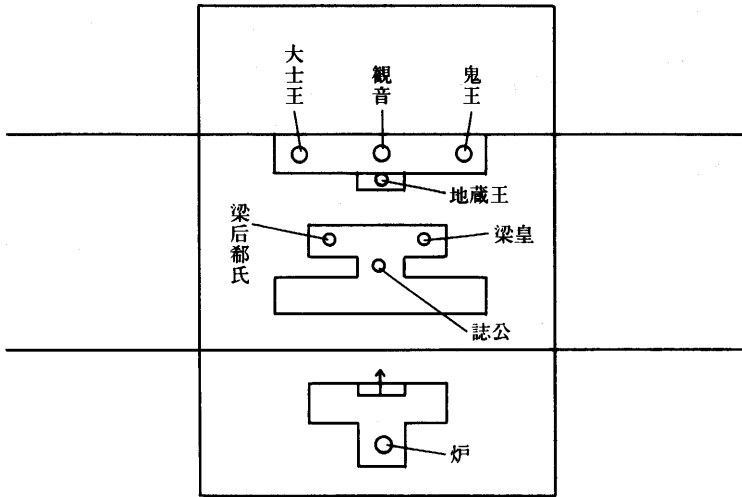
この図においても、亡魂を天界に向かって渡らせる天橋（法橋）の両側の空間と設営を、図3の天橋をはさむ六道牌位の空間（菱郭）に対応すると見ると、両図は極めて類似してくる。図3の「菱郭」は、図1によると、六道の亡霊眷属を供養するための設営で、中に「茶、酒、食、菓子、銭財、綵緞は草薦を以って之を設」^{（10）}けている。つまり、破獄により救出した亡魂、孤魂群を六道をめぐらせた上で、食、銭財、衣を給して、天橋を渡らせるという発想で作られている。これに対して図7では、六道牌位はないが、孤魂、亡魂が巡るべき東、西、南、北の四つの世界を配し、竹で編んだ箕（草薦に当たる）に盛った食物を並べ、中央に天橋を配しているから、構造的に全く図3と同じと言える。

以上を総合してみると、莆仙逢甲普度の目連戲棚場地及びその科儀は、『黄録九幽醮』の直接の影響を受けて構成されていると見てよいと思われる。この点は福州普度と同じである。

Ⅱ 血湖・破獄（塔饑）の場地構造

莆仙逢甲普度では、右の「目連超薦」の他、特に女性亡霊のために「破血湖地獄」（「塔饑」）を行なうが、その場地設営の形も、『黄録九幽醮』の「破獄」の状況に類似している。この場合、血湖に擬した盥（木製）に赤く着色した液を入れた皿をおき、上に七層の塔を立たてものを二基、神殿に向かい合って並べ、後方に地藏王像と判官像を配

图 8 莆仙逢甲普度塔懺場地圖



する。前方には十殿地獄を左右に分けて向き合って排列する(図8)。

この図を見ると、仏座に對面して血湖を含む地獄が作られており、この位置関係は、前述の福州普度科儀、莆田目連超薦と同じく、『黄籙九幽醮』と同じ形になっている。しかも十殿地獄は左右に等分され、向き合って並べられており、図3の二十四獄官、及び九幽地獄と同じ形の配置を示す。また、地獄各門の前に灯蓋を置き、点灯している点も、図3の九幽地獄の蓋灯と同じである。福州普度の地獄よりも『黄籙九幽醮』によく似ている。

血湖盥には、紅液を入れた血の池の皿と、水に游魚を入れた皿、食物を入れた皿の三つを置き、女人の替身三体を吊るす。血湖盥の上の七層の尖塔は軸を中心に回転する仕組に作られ、各層に大士、判官、城隍などの諸神像を配する。儀卓で誦經を終えた僧侶団のうち、主僧は紅衣に戴冠して錫杖をもつ目連の姿となり、遣族を従えて先ず、塔二基の最下層に吊り上げてあつた替身を第二層まで吊り上げ、塔をゆっくり回転させたのち、地獄第一殿の灯蓋と門を地上におろし、錫杖で門、蓋の順に突き破る。この形で、魂身を一層ずつあげ、そのたびに同じ手順で地獄の門を順次に破る。魂身が第七層に達したあとは、地獄の残り第八、九、十殿を単独で破る。これは、『破獄』に、「血湖」からの女魂救出を組み合せたもので、基本的には、「目連追薦」と同じく「破獄」の儀礼に属する。従つて、全体が『黄籙九幽醮』の破獄と同じ系統のものと言える。

要するに、莆田、仙游の普度の場合も、福州普度と同じく、場地の配置が『黄籙九幽醮』に似ている上、「破獄」を中心に科儀を組み立てる点では、福州普度よりむしろ『黄籙九幽醮』に近い面がある。直接、間接に『黄籙九幽醮』の影響を受けているものと考えられる。

四 閩北普度における英靈祭祀—田都元帥

さて、上述においては、北宋の『黄籙九幽醮』と閩北普度との形式上の類似性、血縁関係について検討したが、實質的な面では、『黄籙九幽醮』における英靈重視の觀念が閩北普度に受けつがれている点に注目したい。

前のように、『黄籙九幽醮』では、孤魂を列举するに当たり、戦死した英雄を筆頭にあげ、特に戦死の英靈を重視する姿勢を示す。この点は、閩北普度において、冒頭に田都元帥を祀るという形で継承されているように思われる。以下、福州と莆田に分けて検討する。

I 福州普度の田都元帥

福州普度では、冒頭の「開啓」のところで〈田都元帥咒〉をとなえて、田都元帥を召請する。法師は、先ず、「献香讚」を唱えて香を献じ、〈灯讚〉を唱えて灯を献じたのち、〈金光の咒〉につづいて、次のように唱える。⁽¹⁾

九天風火院□下を奉請す、立ちて云い三たび請う。

田帥の誥もて志心皈命もて礼す。

陽を三部に垂れ、橋を十蓮に挺す。音律を点じ、紅梅□□たり、歌舞を□にして彩鳳翺々たり、王母痾に沈めるときは、交々琵琶□を競いて七魄を回らしめ、天師疫を治むるときは、丹を錦瑟に刻して万民を救う。玉皇の殿使、風月の主人たり、□なるかな歌舞の菩薩！道称す□□天尊！百万の児郎を掌管し、斗中にて聖衆を和合す。大願を□□し、俊を化し英を化し、佐助して行持せしめ、九天に糾察せよ！使□提点昭烈侯よ！風火院

三田都元帥よ！

右の内容から推すと、この田都元帥は、王母、玉皇、張天師などに仕える音楽師、或は鼓吹手という性格と、百万の兒郎（おそらく天兵、陰兵）を指揮する英雄武将の性格の双方を備える。昭烈侯という称号からみて、元来、戦死した英霊が封号を受けて「風火院田都元帥」となったものであろう。

閩北では、この田都元帥は、唐の天宝年間、安祿山軍の南下を安徽の睢陽で食い止め、寵城戦の末、戦死した張巡、許遠、雷万春のうち、六本の矢を顔に受けて立ったまま戦死したとされる雷万春をあてることが一般的である。雷姓を何故、田姓としているかについては、伝説がある。莆田の伝説では、雷万春の将旗「雷」の上部、雨かんむりの部分が暗雲に蔽われて見え、そのために「田」姓の称が生まれたという。この伝説は古くからあったらしく、南宋の岳珂の『程史』卷十にも次のような記録がある。⁽¹²⁾

優伶、序びて進む。儒服にて前に立つ者あり。一人、旁らに揖す。「儒服せる者」乃ち曰わく；敢えて問う、唐三百年間、名ある将帥は何人ぞやと。旁らに揖せる者、曰わく；張巡、許遠、田万春なり、と。儒服〔せる者〕、奮いて起ち、争いて曰わく；巡、遠は是なるも、万春の姓は雷なり。牒を歴考するに、未だ雷を以つて田となす者あらず、と。揖せる者は服せず、撐拒して口を騰す。

とあり、南宋の頃から、地方によっては、雷万春を田万春と呼ぶ処もあつたことを示す。儒服の者は、正史を論拠に反駁しているが、侍者は地方伝説による呼称を信じて服さなかつたということであろう。

一般に閩北では、戦死した英霊という、張巡以下三将をイメージすることが多かつたらしい。シンガポールの福州人の間には、福州の鳳嶺北壇を移した祭祀で三相公を祀るが、これも張巡三将を指す。⁽¹³⁾ 莆田人の威顯廟は武按聖王

雷万春を主神とする。⁽¹⁾ 閩北の田都元帥が、この張巡三將の英靈信仰から出てきた可能性は極めて高い。

但し、右の〈田都元帥咒〉に見える田都元帥は、雷万春、即ち田万春から由来するとしても、かなり変形されている。英靈武將の性格は厳として存するが、その上に音楽師、或は疫を治める巫医の性格を付与されているからである。このうち、音楽師の性格は、田都元帥が福建系の俳優劇団の祖師（戲神）とされる契機をなすもので、重要である。

俗説では、雷万春の弟、雷海青が玄宗側近の音楽師（梨園子弟）で、安祿山に従わずに殺されたという。これが雷（田）万春に付託され混同されたものと見られる。巫医の性格は雷（田）万春が英靈神として村落の守護者の地位を得たあとで仮託されたものと見られる。音楽者としての鼓吹能力も英靈神として陰兵を招きこれを駆使して邪魔を追うに当たり、陰兵の大軍（百万雄兵）指揮に必要なものなので、あとから雷海青を媒介に付与されたものかもしれない。

このように田都元帥は、雷〔田〕万春に雷海青、鬼神駆使の巫師などの性格が付与されて出来上った複合的性格のものであるが、その中核は、英靈神であることは疑いない。既に雷万春とは異なった神格を得て、福州では独立の神として祀られている。シンガポールでも福州人の田都元帥神誕祭祀が行なわれている。その姿は紅顔（紅臉）の若い武將としてイメージされているが、紅臉は「赤心」「忠臣」を表わす。これは『黄籙九幽醮』の孤魂リストに、戦死英靈の特質としてあげる「其れ英雄ありて国を佐け、忠赤もて君に事う」とある。「忠赤」の語を表現したものであろう。この点からも、田都元帥の英靈たることは証し得るのであろう。

福州普度が開啓冒頭に、田都元帥の来臨を請うのは、『黄籙九幽醮』の系統を引く科儀として、その英靈重視の特徴を引きつぐものと解したい。

II 莆田普度の田都元帥

莆田の郷村では、農曆正月の元宵十五日の二、三日前、即ち正月十二、三日の晩に、田都元帥像を廟から奉迎し、「行儺跳火」を行なうという。元宵に瘟疫を追い攘う「郷儺」を行なうのは、各地で見られる郷例であるが、「火の上を跳ぶ」点と、趕鬼の主役が田都元帥である点に特色がある。葉郭立誠『行神研究』（中華叢書、一九六七年、台北）に引用されている『新生副刊』の文は次の如く記す。

家郷の福建省莆田県では、毎年元宵節の二、三日前の晩に、非常に多くの村で「行儺」の行事が挙行される。

神像を抬いで火の上を跳ぶ村もあり、神像を抬いで火の上を踏んだり火の周囲を繞る村もあり、この「行儺」には火はかせないものようである。

神像を抬いで火の上で跳ぶわざは、行儺儀式の中で最も目立つ節目である。年齢を重ね力も強い青壮年の人でなければつとまらない。全村十戸から二十戸位の村で、日暮から跳びはじめて明け方まで続けてや々と終る。各家では門前に、松の薪をつみ重ねて大きなたき火をつくる（大きな戸では二つもつくる）。火燄は最も高く上ったときで人の身長より高くなる。鑼と大鼓が同時に鳴ると、二人の男が木彫の神像を坐らせた神輦をかつぎ、吆喝をかけながら、たき火の上を跳ねながら行き来する。各戸は一〇分から二〇分、跳び、跳び終えたと、神像を神輦からとり出して家の正庁の神桌の上に安置し、道士の先導で、一家中の男子がそろって香を焚き跪拝する。神桌の上には鶏鴨魚や、年糕などの祭品を備えて盛大を極める。道士は咒を誦えて神を祭り、吹鼓手は笙を吹いて楽を奏し、まことに熱鬧である。拜礼が終ると、神を送り門を閉め、別の戸に換わる。

この夜に抬ぎ出されて火を跳ぶ神像は二体ある。一体は「田公元帥」、一体は「白牙將軍」である。伝説によ

ると、「田公元帥」はもと唐代の名將雷万春で、殉難ののち、神となって皇帝を護り、帝（玄宗か肅宗か不明）は、その旗幟の上の「田」の字を見て、「田公元帥」に封じたという。ただ実際には「雷」の字であったのだが、上半分の「雨」の字が雲に蔽われていたため「田」の字に見えたのだという。私の故郷では田公元帥は、顔面が紫色に紅潮した神だと言ってもよい。彼の顔はやはり真赤で、微笑をたたえ、英俊で瀟灑（スラスラ）としている。頭上には二本の長い辮子をつけていて、口の処に螃蟹（カニ）の脚の紋様が画いてある。伝説によると、この紋様は彼が探花に合格して御苑で酒宴を賜わったとき、酒に酔って御苑で座り込んだ際に楊貴妃がいたずらして画いたもので、酔いが醒めて消そうとしたが消えずに残ったのだという（これは勿論、伝説であてにならないが）。

以上をみると、この莆田の田公元帥は、「火神」の趣きがある。或は「雷神」の面影がある。田公元帥の本来の姓は「雷」であったといい、その称号は「風火院」であり、風と火（雷火）を駆使する「雷府」の神としてイメージされていると見られる。

この「雷府」の咒法は、宋から元にかけて齋醮（黄籙醮、九幽醮）が発達するにつれて、その齋醮の効力を邪悪な魔鬼、邪霊の妨害から守るために、雷の力を咒術の源泉として、「雷」府（雷の統稱する官府）所属の天將を役使して邪鬼を駆逐する咒法として発達したものである⁽¹⁶⁾。その法は北宋末の『道法会元』（『道藏』八八四—九四一）所収の「清微道法枢紐」（巻一）、「清微祈禱内旨」、「服雷炁法」（巻八）、「雷霆玄論」（巻六七）などに見えており、北宋末南宋の江南一帯の民間道士や巫師の咒法を正一派道士がとり入れて集成したものとされている。雷府天將の風采は、北宋道教咒術を反映した明代小説『平妖伝』第十三回に「眼は銅の鈴ほどの大きさ、面は紫の蟹の如く、鬚は剛し。幞頭は金色にて毫光を放ち、繡襖には団竜の花様、手には皂旗一面を執り、風を招き雨を喚ぶ行蔵、英雄猛烈にして

誰か敢えて当らん。使者は姓張、天将なり¹⁸⁾（大田辰夫訳）とある。ここに「紫の蟹の如き」面貌とある点は、田都元帥の「丹臉蟹鬚」に通ずる特徴であり、田公元帥が北宋末―南宋の福建鄉村に発達した民間巫師の呪法の流れを引く雷法系の武将（元来は戦死した英雄）に由来する可能性を想定せしめる。雷法自体が北宋末―南宋にかけて江南に急成長した「九幽醮」、「黄籙醮」に伴なって発達したことを考えると、莆田―福州の田公元帥の呪も、この地域に北宋以来流行した『黄籙九幽醮』の内部で、雷法の発達と共に成立したものと考えられる。

五 閩北普度における目連破獄―目連戯成立の背景

さて、次に閩北普度においては目連尊者が破獄の主役にして導入されている点の特徴として注目されるが、この点を検討してみる。

I 福州普度における目連像

前述のように、シンガポールの福州普度は北宋の『黄籙九幽醮』の系譜を引いているが、『黄籙九幽醮』では見られなかった目連尊者の画像を場地内に配置して、目連が破獄者として強く意識されていることがわかる。先ず、図4において、都城隍殿、監齋使者（大土王）と並んで（写真1）、牛に乗った「目連尊者」の大きな画像が並べられている（写真2）。中央の監齋使者は観音菩薩の化身で大土王（鬼王）の姿となり、孤魂群が食物、衣服の奪い合いをしないよう監督する役で普度の主役であるが、右側の都城隍神は、孤魂群の中の悪魂を裁いて地獄に押送する役、左側の目連は善魂を地獄から救出して天界に往生せしめる役として配置されている。道教儀礼には、救苦者として目



写真 1 福州普度，監齋使者（観音）と城隍



写真 2 福州普度目連画図

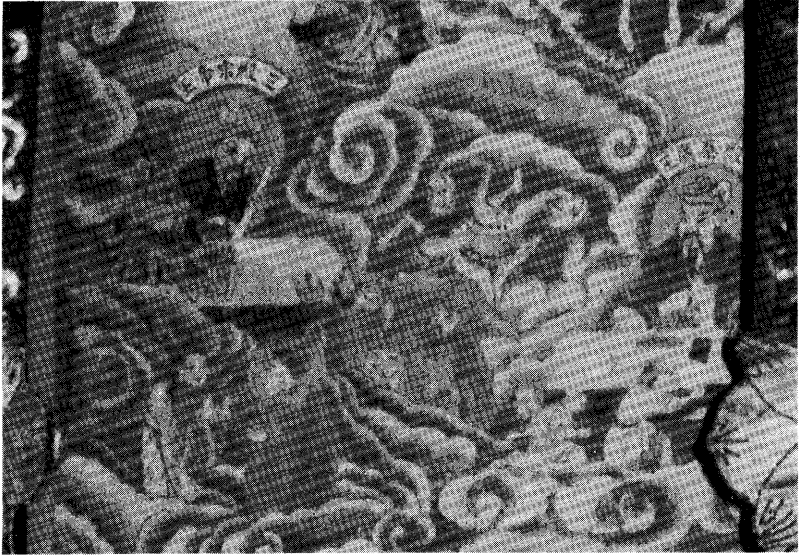


写真 3 福州普度地獄図・目連と母(三殿下)

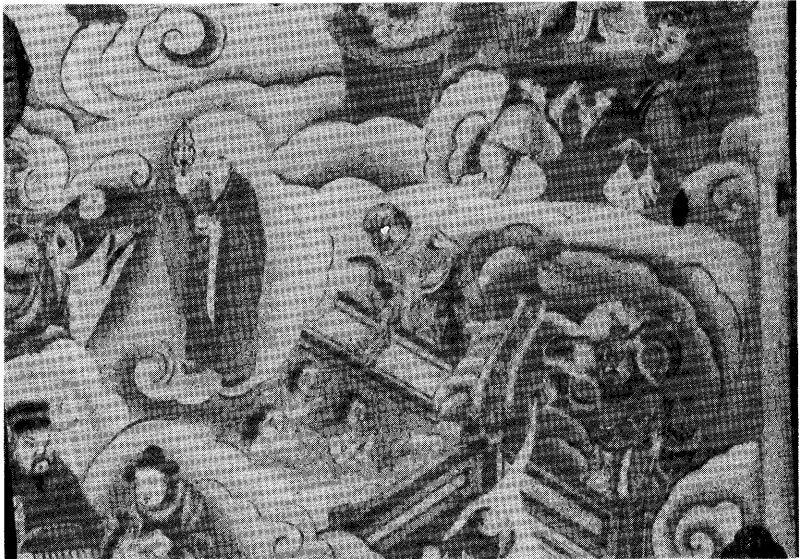


写真 4 福州普度地獄図・目連と母(二殿下)

連を登場させることは少ないが、この福州普度では、仏教系の目連に重要な役割を与えていることになる。

また、図4で三清殿の入口、左右に、地獄図二軸をかけるが、その双方に目連尊者が母とめぐり合う図柄が画かれている(写真3・4)。科儀書は、『黄籙九幽醮』系の道教儀礼の発想で貫ぬかれていて、目連尊者の名は見えないが、場地の設営では、おそらく福州の土着信仰を反映する形で「目連」が強く意識されていることになる。いつ頃、福州の『黄籙醮』系普度に目連が入ってきたのかは、文献の徴すべきものがないが、次にのべる莆田の普度との関連で見ると、南宋頃には入っていた可能性が強い(後述)。

Ⅱ 莆田普度の目連

シンガポールの莆田仏教系普度において、目連尊者による「破獄」追薦、「血湖打城」が儀礼構成上の核となっていることについては、上に述べた通りである。福州の道士系普度が目連画像を掛けるにとどまるのに対し、莆田普度では「目連」による「破獄」、「破血湖」は極めて劇的に演出されている。しからば、莆田―仙游において、目連破獄はいつ頃から普度の主軸になったのであろうか。

ここでもこれを直接に証する文献記録は見当たらないが、莆田の古刹広化寺に宋代建造と伝えられる舍利塔(通称「宋塔」)があり(写真5)、その最下層の石彫群の中に「目連と狗になった母」の『母子相会』の彫像(浮き彫り)が現存している(写真6)。この彫像が伝説通り、宋代以来のものであるとすれば、南宋時代に既にこの地で仏寺の行なう普度に「目連救母」の科儀が演出されていたことを想定し得ることになる。現在のところ、これを確証とすることはできないが、今後の検討課題として提起しておく。

以上、Ⅰ・Ⅱを通じ、何れも明確な推論を行なうほどの証拠はないが、状況としては、福州―莆田地区における

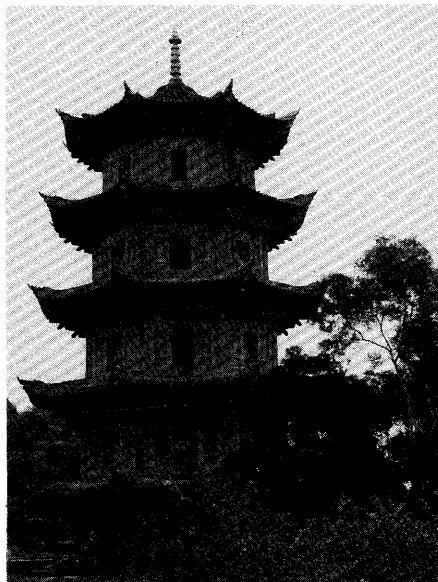


写真 5 莆田広化寺宋塔

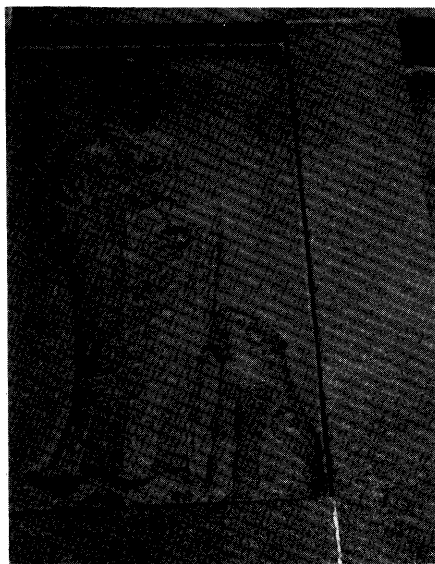


写真 6 莆田広化寺宋塔石彫，目連と母狗

「目連」破獄の成立が南宋頃に遡れる可能性が大きいということを主張しておく。

六 結 語

最後に、上述の論点を総括して結びとする。

ふりかえってみるに、江南地域では、北宋末―南宋にかけて、亡魂（英霊、女魂）鎮撫のための『黄録齋』、『九幽醮』などが流行した。例えば、『夷堅志』支戊卷六（婺州丙会首）の条には、南宋紹熙元年（一一九〇）のこととして、婺州の郷俗、毎に三月三日を真武の生辰なるを以って、闔郭共に黄録の醮を建て、災を攘い福を請う。紹熙元年、富戸陳氏、徐氏、その事を主とする。⁽¹⁹⁾

とあり、浙江婺州では南宋頃から真武帝即ち玄天上帝（北帝）の誕辰祭祀に伴って『黄録醮』を挙行していたことがわかる。

また、同じく『夷堅志』支戊卷五（仕道元）の条では、淳熙十三年（一一八六）のこととして、淳熙十三年、上元の夕、北城の居氏、相率いて黄録の大醮を張君者の庵に建つ。⁽²⁰⁾

とあり、やはり南宋末の杭州での黄録醮が元宵節に挙行されていたことを示す。

また『夷堅志』丙志卷九（呉江九幽醮）の条によると、乾道三年（一一六七）のこととして、

呉の松江の石塘は西に太湖に連なり、舟楫去来し、風濤の虞多く、或は覆溺を致す。乾道三年、趙伯虚、呉江の宰となり、幽冥の間に滞魄訴うる所なきを念い、道士を集めて九幽の醮を県治に設け、以って之を拔度す。⁽²¹⁾

とあり、南宋末の呉江で水幽を祀るための『九幽醮』が挙行されたことがわかる。

福建、特に閩北については、建安府浦城県の人が福州、泉州の官に任じた南宋の文人、真徳秀が多くの『黄籙醮』の記録を残している。例えば、紹定二〜三年間（一二二九〜三〇）に、江州で賊盜が起こり、泉州城が戦禍に苦しんだとき、その犠牲者を祀る『黄籙醮』を任地で挙行している。『西山先生真文忠公文集』卷四九〈普度青詞〉は次の如くである。⁽²²⁾

遺民何の幸ありて、横さまに鄰寇の殃に罹るや、旧郡重ねて臨み、冥塗の苦より拯われんと思ふ。用って追祓を伸べ、各々超昇を冀う。歳は丑寅の間に在り、盜は汀樵の境に作る。癸辛の歳、久しく、既に武備は脩めず、醜類日に蓄く、妖氛の浸すこと広きを致す。惟の時、徳化より永春まで、密かに連なり竊かに発するの区なり。旋いで侵陵の禍を被る。兵戈練らず。誰か賊を禦ぐの方を知らん。官吏相い先んじ、自ら全軀の計を作す。群氓を鋒鏑の下に委ね、二邑を挙げて煨燼の余となる。游魂は太空に蕩よい、枯骨は曠野に暴さる。凄風急雨、諒うに号嗷の悲多からん。厚地重泉、更に幽沉の歎を抱く。念うに此の淪亡の衆、皆嘗つて撫字の人なり。豈に憫惻の情亡からんや。幸くは婦依に路あらんことを！ 属して崇を黄籙に修めしめ、敢えて紫皇に籲び告ぐ。凡そ厥の同じき時、諸郡に暨びて、名を黒簿に隸するあれば、悉く命を朱陵に度われんことを！ 北都の鬼群、復た久しく淹るるの繋なく、西方の浄土、挙げて極楽の游たらん！

文中「(徳化、永春の)一邑を挙げて煨燼の余となる」とあるように、戦禍に斃れた多数の無幸の民の游魂を祀つて『黄籙齋』を挙行したことがわかる。別に同じ卷四九〈黄籙建壇青詞〉には、故郷、閩北の建陽、浦城の被害者を祀つて、おそらく福州か莆田(仙游)で行なつた『黄籙醮』の趣旨を次のようにのべている。⁽²³⁾



写真 7 莆田仙游目連戯，田公元帥

緑林は禍を煽ぎ、隣境の殃に罹るを嗟く。黄籙もて誠を薦め、高穹の憫を垂るるを冀う。属して告盟の礼を挙げ、敢えて哀籲の辭を殫さん。惟の時、汀邵の民本と乱を好むに非ず、況んや聖明の世に値い、皆な生に安んぜんと欲す。祇だ牧御の宜に乖けるに縁り、狙を披きて患を為さ使むるを致す。兩邦相い接して、半ば煨燼の余となる。万姓何の辜ありて、鋒鏑の下に殞ざる。虐燄既に劍水に延び、妖氣幾んど建陽に及ぶ。泉壤幽沈し、痛ましき矣！ 銜冤の鬼！ 道塗顛踣し、傷しき哉！ 失業の人！ 深く厄運の未だ消えざるを虞れ、惟だ高穹の愍う可きに頼る。願わくは、嘿として造化に回り、以って普ねく生靈を拯わんことを！ 遠くは閩部の八州、近くは浦城の四境、兵戈頓みに息み、寇尅侵さず、田里相い安んじ、耕稼自若たらんことを！ 凡そ彼の身を失いて賊に従えるものも亦た皆な過を悔いて民と為らんことを！ 本業争いて趨き、渤海鷄豚の楽あり、旧汗悉く変じ、崑岡玉石の焚なか

らんことを！

以上のごとく、『黄籙醮』は、戦禍など、大量の死者、孤魂が出たときに行なわれていること、閩北、閩南を通し
て北宋—南宋の間に、頻繁に行なわれていたことがわかる。

本稿がとり上げた北宋・無名氏の『黄籙九幽醮無碍夜齋次第』は、上述の北宋—南宋間の江南、福建の『黄籙醮』、『九幽醮』を土台として成立したものと想像される。福州—莆田の普度はこの系統を直接ひいており、従つてその上に成立した莆田目連戯もまた北宋南宋以来の『黄籙醮』、『九幽醮』の発想を背後に背負つていると言えよう。

莆田の目連戯は、冒頭に必ず田公元帥の跳舞を演ずる（写真7）。田公元帥は上述のように福建で信仰される英霊神（雷万春）が「雷府」の天将にとり立てられ、破邪逐疫の巫神となつたものであるが、その背後には『黄籙九幽醮』の英霊祭祀の発想が働いている。

換言すれば、莆田目連戯は、英霊祭祀（田公元帥）と亡魂祭祀（目連救母、目連追薦）をつなげて成立しているの
であり、この構造は、英霊祭祀と破獄を重んずる北宋の『黄籙九幽齋無碍夜齋次第』の延長の上にあると考えられる。
これによつて莆田目連戯が安徽、浙江、江蘇、江西、湖南等の各地目連戯の中で、ほぼ南宋に遡れる最も古い沿革を
有することを主張して本稿の結びとする。

1 陳国符「明清道教音楽考稿（一）」・『中華文史論叢』（二九八—）。

2 原文：

是時即有救苦真人、上白天尊言、臣觀幽陰地獄之内、羅酆北府之中、一切亡魂沉淪受苦、或攀劍樹、或踐刀山、碓搗磔
閩北の普度と目連戯

磨、鑊湯灼炭、肢体零壞、膏血交流、万死千生、不捨晷夜、其間獨有一人、形容無畏、巡履無傷、往來獄中、苦不能言、祥瑞悉、覆護其身、不審此人、有何善果。

天尊言、善哉！善哉！緣此人在生之日、心奉大道、志慕善緣、曾受九真妙戒、救苦真符、佩負靈文、持心弗怠、所以死魂快樂、自在逍遙、雖經地獄之中、不受輪迴之苦、削名黑簿、長觀光明、即昇上南宮。克證仙果。

3 原文：

法師与道衆巡遶交郭、吟光明頌。

次往地獄官位、破二十四地獄文在別卷、逐位破了、旋除旛子、揭位牌。

次入茆郭南門、穿入起。

4 原文：

其或英雄佐國、忠赤事君、逢危不顧於一身、致命乃酬於万乘。歿於沙磧、死在戰場、骨未痊藏、魂方沉滯。

或即効官万里、馳命四方、染疫癘以卒終、遇傷害而橫夭、閔源為阻、閭里攸餘、春夏秋冬、絕於祭祀。

或投名上國、商賈東西、跋履山川、泛涉江海、遇毒蟲而害命、遭狂浪以摧舟。

或幼入空門、長依積教、孤陰於林泉之裏、遲栖於巖谷之中、志慕修行、自甘寂寞。或為遊客、或掌化緣。在苒傾亡、因循遷化。

或情嫌凡俗、心樂仙鄉、全清閑養素之名、居碧嶂出塵之界、未遂長生之理、難逃短景之期。

或有工妙丹青、芸高藥〔藥〕術、因茲遊歷、客死他鄉。

或効力往還、備身驅役、或有冤而暗害、或無告以自殘、魂魄飛揚、無依無倚。

或作狂徒劫盜、逆党叛臣、負國難以自甘、墮陰冥而敢恨。

或有欺慢神理、或不孝父孃、受天譴以滅殂、犯罰責而致殞。

或因貧而寒餓、或避法以逃藏、計窮而自戾山林、事急而身投河井。

或被虎狼啗食、或以水火漂焚。

5 原文：

是女是男、或少或老、雖莫知於名姓、冀相率以俱來。

6 田仲一成『中国鄉村祭祀研究』（東京大学出版会、一九八九）二七七頁以下。

7 田仲一成『中国の宗族と演劇』（東京大学出版会、一九八五）一〇二六頁以下。

8 同前一〇七〇頁。

9 同前一〇四三頁。

10 同前一〇三九頁。

11 原文：

奉請九天風火院下、「立云」三請。

田師誥、志心飯命礼。

垂陽三部、橋挺十蓮、点音律而紅梅破□、□歌舞而彩鳳翱翔、王母沈痾、交競琶□回七魄、天師治疫、刻丹錦瑟救万民。

玉皇殿使、風月主人、□兮歌舞菩薩、道称□□天尊、掌管百万兒郎、斗中和合聖衆、□□大願、化俊化英、佐助行持、九天

糾察、使□提点昭烈侯、風火院三田都元帥。

12 原文：

優伶序進、有儒服立於前者、一人旁揖之、「儒服者」乃曰、敢問唐三百年間、名將帥何人、旁揖者曰、張巡、許遠、田万春。儒服奮起爭曰、巡、遠是也。万春之姓雷、歷考牒、未有以雷為田者。揖者不服、撐拒騰口。

13 田仲前掲（注6）書五八七頁。

關北の普度と目連戲

14 同前書六一三頁。

原文：

在家鄉福建莆田、每年元宵節的前兩三天晚上、很多村莊舉行行儺儀式、有些村莊抬著神像跳火、有些村莊抬著神像踏火、繞火、似乎行儺是少不了火的。

抬神像跳火可以說是行儺儀式中最精彩的節目。需要年富力強的青壯年人纔能勝任。整個村莊一二十戶、從天黑開始跳、一直跳到天亮纔止。火是用松薪燒成枕狀一大堆的（大戶人家有兩大堆的）。火燄最高時比人還要高。金鼓齊鳴、兩個人抬著一座乘著木雕神像的轎。吆喝著在火堆上面跳來跳去。每戶大約跳一二十分鐘、跳畢、把神像從轎內取出、送入正庁神桌上安置、由道士率領全戶男子焚香跪拜。神桌上陳列著鷄鴨魚肉年糕等祭品、豐盛異常。道士誦咒祭神、吹鼓手吹笙奏樂、欵是熱鬧。完後送神閉門、更換另一戶。

這夜抬出跳火的神像有兩尊、一為「田公元帥」、一為「白牙將軍」。掘伝說：「田公元帥」原為唐代名將雷万春、殉難後為神護駕。帝（不知指玄宗抑肅宗）見其旗幟上有一「田」字、立即封他為「田公元帥」；而實際上則為「雷」字、因上半「雨」字被雲層遮蔽。「田公元帥」在家鄉可以說是「一尊紅得發紫的神、他的臉也是朱紅色的。微含笑意、英俊瀟灑、頭上梳着兩條長辮子。嘴角上画著螃蟹腳、掘伝說是因他考中探花、賜宴御苑、酒醉後睡在御苑中、被楊貴妃戲弄画的、醒後便無法洗去（這当然是神話性的伝説）。

16 松本浩一「道教と宗教儀礼」・『道教』第一卷『道教とは何か』（河出出版、一九八三）〈雷法の発達〉、二二九頁以下。

17 松本前掲論文、二二二頁。

原文：

眠似銅鈴般大、面如紫蟹鬚剛、幪頭金色放毫光、繡襖团竜花樣、手執皂旗一面、招風喚雨行藏、英雄猛烈誰敢当、使者姓張天將、

19 原文：

婺州鄉俗，每以三月三日真武生辰，闔郭共建黃籙醮，攘災請福，紹熙元年，富戶陳氏，徐氏主其事。

20 原文：松本前揭論文引、

淳熙十三年，上元之夕，北城居民，相率建黃籙大醮於張君者庵。

21 原文：松本前揭論文引。

吳松江石塘，西連太湖，舟楫去來，多風濤之虞，或致覆溺，乾道三年，趙伯虛為吳江宰，念幽冥間滯魄所訴，集道士設九幽醮於鼎治，以拔度之。

22 原文：

遺民何辜，橫罹鄰寇之殃，旧郡重臨，思拯冥涂之苦，用伸追祓，各冀超昇。歲在丑寅之間，盜作汀樵之境。癸辛歲久，既武備之弗脩，醜類日蕃，致妖氛之浸庑。惟時德化以及永春，密連竊發之區，旋被侵陵之禍。兵戈匪練，誰知禦賊之方。官吏相先，自作全軀之計。委群氓於鋒鏑之下，拏二邑為煨燼之余，游魂蕩於太空，枯骨暴于曠野，淒風急雨，諒多号噉之悲。厚地重泉，更抱幽沉之歎。念此淪亡之衆，皆嘗撫字之人，豈憫惻之亡情，幸婦依之有路，屬修崇於黃籙，敢籲告於紫皇，凡厥同時，暨于諸郡，有隸名於黑簿，悉度命於朱陵，北都鬼群，無復久淹之繫，西方淨土，拏為極樂之游。

23 原文：

綠林煽禍，嗟隣境之罹殃，黃籙薦誠，冀高穹之垂憫，屬拏告盟之禮，敢殫哀籲之辭。惟時汀邵之民，本非好亂。况值聖明之世，皆欲安生，祇緣牧御之乖宜，致使猖熒而為患。兩邦相接，半為煨燼之余，万姓何辜，殞於鋒鏑之下。虐筮既延於劍水，妖氛幾及於建陽。泉壤幽沈，痛矣！銜冤之鬼。道塗顛踣，傷哉！失業之人。深虞厄運之未消，惟賴皇窮之可愬。願嘿回於造化，以普拯於生靈。遠而閩部之八州，近則浦城之四境。兵戈頓息，寇虜弗侵，田里相安，耕稼自若。凡彼失身而從賊，亦皆悔過而為民。本業爭趨，有渤海鷄豚之樂，旧汙悉變，無崑岡玉石之焚。

閩北の普度と目連戲